

思春期における児童生徒の問題行動の予防に関する探索的研究 —コラージュ法を用いた攻撃性の発見—

山本 映子*1 野村 幸子*1 中村 百合子*1 北川 明*1
竹下 比登美*2 北川 早苗*3 近喰 ふじ子*4

*1 県立広島大学保健福祉学部看護学科

*2 廿日市市立野坂中学校

*3 神辺町立湯田小学校

*4 東京家政大学大学院文学研究科

2005年 9月12日受付

2005年12月13日受理

抄 録

近年、思春期の児童生徒による他者への攻撃性は、いじめや暴力、稀には殺人といった形で表出し、大きな社会問題となっている。本研究は、県内の公立小・中学校3校の協力を得て、小学5・6年生及び中学2年生の計452名を対象として、子どもの持つ攻撃性を早期に発見し、行動化する前に予防するための対応策を探索することを目的とした調査報告である。方法として、彼らの心身の健康状態と心を理解することが重要と考え、健康調査と攻撃性質問紙、心理テスト（エゴグラム）及び自己投影法であるコラージュ法を用いた。攻撃性については表出性、不表出性攻撃性をコラージュ作品との関連でみた。結果は、思春期の特性や集団力動など作品への影響因子が推測され、必ずしも関連しなかったが、攻撃的アイテムを示唆する傾向が得られた。コラージュ制作後の心身健康状態では、症状個数は有意に減少し、精神面では肯定的変化を得た。コラージュの自己治癒力、カタルシス効果が考えられ、攻撃性予防対策に応用の可能性が示唆された。

キーワード：思春期、攻撃性、コラージュ、攻撃的アイテム、カタルシス効果

緒言

ここ数年、思春期の子どもの精神保健に関する問題行動は、不登校をはじめ、いじめ・暴力・殺人など、低年齢化と残虐性を増した事件として後を絶たない。今や、社会的な問題として学校現場で働く者にとっては脅威にさえ感じ、その予防対策を見出すことは急務と考える。思春期とは学童期から青年期への移行過程であり、子どもから大人への移行期でもある。心身ともに変化が激しく、心理・社会的発達も平穏なものでなく、「疾風怒濤の時代」「否定期、第2反抗期」「自我発見の時代」などと命名されているように、揺れ動く児童生徒の心を理解することは至難である。

しかし、筆者らは、いじめや暴力、殺人といった攻撃性の前段階として、「子どもの精神・身体に何らかの症状として表われるだろうか?」、「芸術的表現(ここではコラージュ法)の中に見出せるであろうか?」、更に、「攻撃性の表現はコラージュ上の表現とは異なるのではないか?」といった疑問を日頃から抱いていた。この疑問に対応すべく実践をすることで、子どもの心の把握ないしは理解することに繋がるのであれば、行動化する前に何らかの予防的な処置が講じられ、事前の対処ができる可能性は大きいと考えた。

コラージュ作品からみた攻撃性表現について、平井(2003)は、男児に「内的な攻撃性が象徴的に表現される傾向」が見られたが、女児は1回のみ制作では、内的な攻撃性を表出するには至らず、今の自分を表現するにとどまっていた¹⁾と報告している。その中で、攻撃性質問紙の得点が高い児童のコラージュ作品は、必ずしも攻撃的ではなく、むしろ攻撃性が感じられないものが多かったが、このことは、質問調査をコラージュ制作後に実施したことを問題点として挙げている。

筆者らは、この報告の問題点を踏まえて、攻撃性質問紙をコラージュ制作前後で実施するとともに、対象となる児童生徒数を452名に拡大した。その結果、「攻撃性のアセスメントとして、コラージュ作品が使えるか」ということについては、利用できる可能性の示唆は高まるであろうと考えた。

近年の攻撃性研究の特徴は、質問紙法による測定が多用されていることである。しかし、本研究では、質問紙法にコラージュ法(投影法でもある)を加えて使用した。コラージュ制作によるカタルシス効果を体験しながら、その前後に心身の健康調査及び心理テスト(エゴグラム)を併せて実施することで、子どもの状態把握がより可能となったと考える。

コラージュを攻撃性尺度として用いた研究は、筆者らの知る限り前述の平井¹⁾のみである。この“児童の攻撃性と健康との関係”に注目した報告を参考に、攻撃性(表出性・不表出性)と精神・身体症状および

コラージュ作品との関係についても、同じ尺度による統計学的手法を用いて分析を行った。本研究を実施するに当たり、倫理的配慮を行っている。

I 研究目的

思春期の児童生徒の問題行動(攻撃性)を行動化する前に発見し、予防的措置が講じられるための示唆を得ることを目的とした。具体的には、

1. 児童・生徒のコラージュ上の表現と攻撃性質問紙による表現を照合・検討し、両者の関連をみる。
2. 児童・生徒の心身健康状態、心理テストの結果を、コラージュ制作前後で比較し、統計学的に検討する。
3. 攻撃性に関する質問紙調査を行い、健康調査との関連性をみる。
4. コラージュ作品を分析し、攻撃性の表現、アイテムを知ることで、アセスメントとしての有用性を探る。
5. 児童生徒の問題行動の行動化を予防するための措置に示唆が得られるか、検討する。

II 方法

1. 研究対象：H県内の公立小学校に在籍するA校5年生100名(女児45名、男児55名)、6年生101名(女児45名、男児56名)、B校99名(女56名、男43名)、公立中学校1校に在籍する2年生152名(女子67名、男子85名)、合計452名。
2. 手続き：調査時期 2004年7月～2004年11月(4日間)
 - 1) 実施場所：各教室で、A校の5・6年生及び中学2年生は、1時限～4時限目にクラス順に実施。B校6年生は3クラス一斉に、時間は60分で、同一手続きで行った。
 - 2) 材料
 - ① 小学生用攻撃性質問紙(HAQ.C)²⁾…「表出性攻撃性」「不表出性攻撃性」の2因子から構成され、各8項目からなる16項目について検討した。「とてもよくあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で実施し、得点化した。それぞれ得点が高いほど、攻撃性が高い。コラージュ制作前後に実施、男女別にそれぞれ分析した。
 - ② 橋口式健康調査票(精神的健康・身体的健康)…それぞれ15項目で構成。精神的健康については、「明るいー暗い」「楽しいー退屈な」「満足なー不満足な」など相対する内容を、「とても」「やや」「ふつう」から選択し、5件法で行った。

点数が高いほど良好な状態を指す。身体的健康については症状を「かなり」「やや」「なし」の3件法で記入させ、個数で表した。コラージュ制作前後で比較し、攻撃性との関連を検討した。

- ③ コラージュ・ボックス法（一部、マガジン・ピクチャー・コラージュ法）…八つ切り白画用紙使用。切り抜きを入れた箱を班毎に準備した。各自貼りたい物も持参した。実施スケジュールは、挨拶・コラージュの説明・教示（5分）、調査表記入・回収（10分）、コラージュ制作（35分）、調査表記入・回収（10分）：合計60分。
 - ④ エゴグラム：小児 AN-EGOGRAM 小学生高学年用（千葉テストセンター）エゴグラム・チェック・リスト（中高生用：杉田ら）を使用。コラージュ制作日の前後2週に各学校で実施してもらった。近喰の報告³⁾を参考に健康と攻撃性との関連を検討した。エゴグラムは、人間の自我の働きを5つの観点から捉えている。即ち、CP (critical parent), NP (nurturing parent), A (adult), FC (free child), AC (adapted child) である。
3. 分析方法：質問紙の処理には、統計ソフト SPSS12.0J for Windows を使用。コラージュ作品は、杉浦⁴⁾・平井¹⁾の分析を参考に、切片数、貼り方、台紙の余白、アイテムの内容や形式分析を行い、研究者5人による作品の印象評価も行った。評価は、コラージュ療法を実際に臨床場面で用いている大学教授2名とコラージュ経験者の教員3名で、コラージュ作品1枚ずつに対して「攻撃的」か「非攻撃的」か評定し、質問紙で攻撃性の高い児童生徒の作品について検討した。質問紙は得点化し、平均値±SDで表出性・不表出性攻撃性ともに高群・低群（H群・L群）とし、表出性・不表出性攻撃性が共に高い・共に低い群を（HH群・LL群）として形式分析、性差を検討した。

Ⅲ 結果

（詳細は 表1～4, 図1～2, 写真1～4を参照）

エゴグラムを除く質問紙調査は、コラージュ制作前後に実施した。（以下、コラージュ制作前は制作前、コラージュ制作後は制作後と適宜、略す）

<中学2年生の結果>

Ⅲ-1 健康調査の結果 <図1-1, 図2-1>

- 1) 身体的健康面では、制作前の症状訴え個数は、生徒 (n=150) 一人当たり 5.2 個であったが、制作後は 3.0 個へと有意に減少した ($p < 0.01$)。訴えの個数に男女差は認められなかった。図1-1で

見られるように、制作後は全ての症状が減少したが、訴えが多い中では「目が疲れる」(70%が約42%)、「首がこる」「肩がこる」(約54%が35~42%)、「足が痛い」(52%が28%)、「足がだるい」(46%が29%)で顕著であった。

- 2) 精神的健康状態を制作前後で比較すると、「ひまな」「元気な」「さみしくない」「のんびりした」の項目以外、有意に上昇した ($P < 0.01$)。性別では差は見られなかった。

Ⅲ-2 攻撃性調査の結果

- 1) 表出性攻撃性、不表出性攻撃性 <表1>
制作前後の2つの攻撃性を分析した。表出性攻撃性（表出性攻撃と略す）では、男子 ($p < 0.01$) の得点が高く、不表出性攻撃性（不表出性攻撃と略す）でも ($p < 0.05$)、男子の平均が高かった。生徒全員の表出性攻撃は、前後で有意差があった ($p < 0.05$) が、性別では男女共に前後で差はなかった。不表出性攻撃では、前後差はなかった。
- 2) 攻撃性と健康状態の関係 <表2>
攻撃性と健康状態相互の関係を相関係数でみた。不表出性攻撃と身体症状個数では弱い正の相関がみられた ($p < 0.01$)。精神的健康状態で相関は認められなかった。

Ⅲ-3 エゴグラムと健康調査、攻撃性との関連

- 1) コラージュ制作前のエゴグラムの結果<表3>
制作前のエゴグラムの状況は、FCが最も高く、最も低いのはACであった。活発な中学生の自己状態（平均）といえよう。
- 2) エゴグラムと健康調査、攻撃性との関係
身体症状個数とACでは相関係数 r が 0.4 と弱い正の相関が見られ、症状の個数が多いほどACの点数が高い傾向にあることが窺えた。精神的健康状態ではFCとの相関係数が0.37であり、弱い正の相関がみられた。攻撃性とエゴグラムとの相関係数では0.3以下と低い数値だが、表出性攻撃ではFCと正の相関、NPでは負の関係が、不表出性攻撃ではAC間に正の関係性が窺われた。ACとFCという子どもの心の部分と攻撃性の関連で、弱いとはいえ相関が見られたことは、攻撃性発見やその予防のための面接で、コラージュと併せて活用することで対象の心の理解がより深まることが示唆されたと考える。

Ⅲ-4 コラージュ作品分析と攻撃性の関係<表4-1>

生徒 (n=146) のコラージュ作品の形式分析では、台紙の縦・横の使い方、すげかえ・はみ出し・重ね貼り・銃の有無では表出性攻撃、不表出性攻撃の得点差はみられなかった。吹き出し文字は、文字があ

る方が20.22 (SD3.49) で文字なし群18.15 (3.82) に比べて不表出性攻撃の平均が高くなっていて ($p < 0.05$)。切片数との相関では、表出性攻撃とは相関は見られなかったが、不表出性攻撃では相関係数としてはきわめて低い ($r=.171$) が5%で有意差があった。余白の分量との関係では、表出性攻撃、不表出性攻撃共に相関関係は見られなかった。

表出性攻撃得点では26点以上(H群)が150名中24名(16.0%)で男子15名、女子9名であった。不表出性攻撃得点では23点以上をH群として25名(16.7%)おり、男子19名、女子6名であった。

表出性攻撃、不表出性攻撃H群男子に「すげかえ」が各4名、「はみ出し」1名と2名が見られたが、女子はどちらにも見られなかった。また、「吹き出し文字」が表出性攻撃H群男子に11名(73.3%)、不表出性攻撃では13名(68.4%)みられた。攻撃的アイテムの一つと考えられる「銃」の有無では、男子に表出性攻撃で8名(53.3%)、不表出性攻撃で9名(47.7%)みられたが、女子はどちらにも見られなかった。切片数では、表出性攻撃を見た場合、男子で平均12.67枚(SD7.93)、女子で5.67枚(2.40)と男子の切片数が多く「危険率」5%で差がみられた。不表出性攻撃では男子12.16枚(8.01)、女子14.17枚(7.52)で男女に差はなかった。余白の分量では、表出性攻撃男子で平均54.54%(SD26.17)、女子62.48%(27.62)と男女差は見られなかった。不表出性攻撃でも同様に差はみられなかった。重ね貼りは表出性攻撃H群では男女共に約6割にみられ、不表出性攻撃では男子11名と約6割、女子では約5割にみられた。

以上から、「すげかえ」「吹きだし文字」「銃」表出性攻撃における切片数などは男子のみに見られた表現特徴といえるが、余白の多寡や重ね貼りなどでは性差はない。これらは印象評定での攻撃性の有無に与える影響は大きいと感じたが、攻撃性得点でH群にL群との発現有意差のあるコラージュ形式には何があるかは明確にできなかった。

研究者らの印象評定で攻撃的表現だと感じた作品の多くは、攻撃性得点H群(ままとまりのなさ・文字表現)(写真1)や攻撃性HH群(すげかえ・ままとまりのなさ・文字・異様さ)(写真3)で一致を見た。しかし、攻撃性得点は平均値であっても「すげかえ」(写真4)が見られたり、不表出性攻撃性H群女子の作品(写真2)からは攻撃性を読み取れないなど、一回の作品でアセスメントするには疑問を感じた。また、制作後の攻撃性得点の高低をどのように解釈するかも明確にできず、課題として残された。

<A小学校5・6年生の結果>

III-1 健康調査の結果 <図1-2, 図2-2>

- 1) 身体的健康面では、制作前に児童(n=201)の約81.6%が何らかの症状を訴えており、性差を認め($p < 0.01$)、女兒(n=90)よりも男児(n=111)の方が多かった。全体の訴え内容は、足、首、肩、目の症状が多かった。制作後は減少し、性差では、女兒が男児よりも有意に減少した($t=-2.97, p < 0.05$)。
- 2) 精神的健康面では、制作前の平均合計得点は学年、性差間に有意差は認めなかった。制作後では「ひまな一いそがしい」を除く14項目で上昇(好転)した($t=-13.40, p < 0.01$)。精神的健康と身体的症状訴え個数との関係では、有意な相関は認められなかった。

III-2 攻撃性調査の結果

1) 表出性、不表出性攻撃性 <表1>

制作前は、どちらの攻撃性得点も学年、男女間で有意差はなかった。男児(n=111)では、表出性攻撃H群20名(18.0%)、L群15名(13.5%)、不表出性攻撃H群24名(21.6%)、L群18名(16.2%)であった。女兒(n=90)は、表出性攻撃H群16名(17.8%)、L群11名(12.2%)、不表出性攻撃H群14名(15.6%)、L群9名(10.0%)であった。攻撃性HH群の児童は15名(男8名、女7名)で、攻撃性LL群は10名(男6名、女4名)であった。男児の中には表出性攻撃がH群で不表出性攻撃がL群の者が2名、その逆で表出性攻撃がL群で、不表出性攻撃がH群の者が1名いた。制作後、表出性攻撃と不表出性攻撃得点は、どちらも有意に減少した。しかし、学年、性差による違いは認められなかった。

2) 攻撃性と健康調査の関係 <表2>

制作前の表出性攻撃及び不表出性攻撃と身体症状訴え個数との間には弱い正の相関を認め、攻撃得点が増えるほど、身体症状を訴える個数が多くなっていったが、精神的健康で相関は認められなかった。

III-3 エゴグラムと健康調査表、攻撃性との関係<表3>

エゴグラムと身体症状、精神的健康、表出性攻撃、不表出性攻撃とで相関係数を算出した(n=170)。NPと精神的健康、FCと精神的健康、表出性攻撃、不表出性攻撃との間で正の相関を認めた。FCが増加すれば精神的健康も上昇するが、同時に表出性攻撃、不表出性攻撃得点も増加する傾向にあるといえる。

III-4 コラージュ作品分析と攻撃性の関連<表4-2>

作品の形式分析では、台紙からはみ出し、重ね貼り、吹き出し文字、切片数、余白の分量で攻撃性

との関連を見たが、有意な関連はみられなかった。文字多変量解析を行うなど今後の課題である。次いで、①切片数 ②はみ出し：台紙の縦横③重ね貼り④切り方 ⑤余白の分量 ⑥裏コラージュ・すげかえ・同一素材・吹き出し ⑦攻撃的アイテム（バット、拳、銃刀、鋏、棒、尖塔、戦闘、焰、花火、氷柱、文字、怪獣）と⑤テーマ、⑥印象などを取り上げ検討した。これら6項目（銃を含む）と攻撃性で有意な相関は見られていない。

尚、児童では、「すげかえ」表現や「銃」の使用は皆無であった。しかし、攻撃性得点が高く、研究者らによる作品の印象評定でも“攻撃性あるいは何らかの問題行動あり”と評定した児童は、教諭の観察像と一致が多く見られた。印象評定は中学生と同様に、重ね貼りや吹き出し文字、同一素材や余白の分量と位置、切片数などからの判断による。

< B 小学校6年生の結果 >

III-1 健康調査表の結果： <図1-3, 図2-3 >

- 1) 身体的健康面では、制作前に児童 (n=99) の 76.8% が何らかの症状を訴えており、性差に有意差が見られた ($p < 0.01$)。制作後、症状は有意に減少した ($t = -4.16, p < 0.01$)。
- 2) 精神的健康状態は、制作後は有意に上昇した ($t = -6.256$) ($p < 0.01$)。項目別では、「ひまな—いそがしい」「さみしくない—さみしい」「のんびり—せっかちな」「体調がよい—体調がよくない」を除く 11 項目で有意に上昇（好転）が見られた ($p < 0.01$)。

III-2 攻撃性調査の結果 <表1 >

表出性攻撃は、男児より女児の平均点が高く、不表出性攻撃では男児の方が高かった。しかし、表出性・不表出性攻撃のいずれも男女差は認められなかった。

表出性攻撃H群・L群とも 17 人 (17.2%) で、不表出性攻撃はH群 16 人 (16.2%)、L群は 17 人 (17.2%) であった。また、攻撃性HH群・攻撃性LL群共に 4 人 (男女各 2) であった。制作後、男児は表出性・不表出性とも減少し、女児は得点が上昇したが、有意差はなかった。

III-3 攻撃性と健康調査の関係 <表2 >

表出性攻撃、不表出性攻撃の各合計得点と、身体症状の個数、精神的健康の合計得点とで相関係数を算出した。その結果、表出性攻撃と身体症状の間には弱い正の相関を認め、攻撃得点が高いほど身体症状個数が多くなることが考えられた ($r = -.348, P < 0.01$)。

表出性攻撃と精神症状の間は $r = 0.02$ で殆ど相関はないといえる。また、不表出性攻撃と精神状態の間には負の中程度相関があり、不表出性攻撃得点が高いと精神状態の不調を訴える傾向が見られた。

III-4 エゴグラムと健康調査・攻撃性との関連 <表3 >

FC と精神症状、身体症状との間で弱い正の相関を認め、表出性攻撃との間には中程度相関関係が認められた。A、NP と身体症状の間にはやや相関がみられた。また、制作前の性差別平均点の t 検定を行った結果、女児の NP が高かった ($p = 0.09$)。尚、エゴグラムと攻撃性の検討は、実施手順や時期が他校と異なったため、今後の課題とした。

III-5 コラージュ作品分析と表出性H群、不表出性H群 <表4-3 >

コラージュの切片数 (平均 12 枚) との間には、攻撃性と相関はみられなかったが、余白の平均 (47.0%) は表出性攻撃 ($r = .235$) でやや弱い相関がみられた。意味のある文字を記入・使用した児童は 56.6%、台紙を縦に使用したのは 5 名で、これらと攻撃性に相関はみられない。男児で「銃」を用いたのは 7 名で、その中で表出性・不表出性攻撃H群は共に各 1 名であった。

表出性攻撃H群 (男 5 名、女 8 名) と不表出攻撃H群 (男 7 名、女 5 名) の共通点は、切片数が 11 枚であったことである。粗雑な切り方はなかったが、台紙の余白量が多くバランスが悪く感じた作品が男女各 6 名にみられた。素材は、人間、動物、風景、食べ物、建物、イラストの人間・動物であった。表出性H群男児で銃を貼った者は 1 名で、不表出性H群では漫画やイラストの戦闘場面を貼った者が各 3 名であった。不表出性男児で台紙を縦にしたのは 1 名で、教会の周囲に生肉を台紙一杯に貼り、書き込みや吹き出し文字も見られた。重ね貼りは不表出性H群全員に見られた。

女児の攻撃性H群は、素材内容は変わらず、花火が共に 1 名見られた。猫や犬に吹き出し文字を書いたものは共に 5 名いた。

HH群 (男女各 2) は切片数平均 17 枚 (2 ~ 39) で小さく丁寧に切り貼りしていた。

その中の男児は、銃を突きつけて「さあ、うってみな」「やるな!」と文字を貼っていた。4 人とも作品のバランスが悪く、余白の位置はばらばらであった。

以上から、B小6年生の攻撃性の表現は、男児では直感的で理解し易いが、女児では貼られた素材で判断することは困難であり、吹き出し文字は内容で判断することが必要だと感じた。

IV 考察

本研究は、昨今の、低年齢化した殺人や陰湿ないじめ、非行、長期化する不登校など思春期の問題行動を予防するための方法を得るための探索的研究を意図して計画された。調査対象の全児童生徒にコラージュ制作後の感想を聞いたが、彼らの表情態度は生きいきと明るく変貌し、「またやりたい」「満足した」「面白かった」という肯定的な反応であった。この声は、コラージュ制作後の精神的健康調査結果と一致した。今回、攻撃性尺度による質問紙法だけでなく、集団コラージュという方法で調査を実施したが、「コラージュ制作」(=「芸術」)³⁾による自己治癒力の促進、カタルシス効果が得られ、被験者の共感に繋がったことが推察された。

コラージュ療法は心理療法として成立したものであり、クライアントと治療者の2者関係から重視されるものである。しかし、コラージュに関する理論は、1対1の治療場面のみならず、集団、集団での自己開発、グループワーク等での応用を示唆し、有意義なものとして医療・福祉・教育・産業の場など広い分野で活用されている⁵⁾。

本研究目的で「攻撃性は、芸術的表現(コラージュ)の中に見出せるであろうか?」を検討することをあげたが、この疑問に明快な答を得ることはできなかった。コラージュ作品の形式分析の結果から、攻撃性表現に吹き出し文字や重ね貼り、余白量と位置などから判断して、攻撃的と思われるアイテムや素材の傾向は把握できた。しかし、長年のコラージュ実践体験から得られた印象評定も、調査結果と全て一致するには至らず、コラージュが攻撃性を示唆するアセスメントとして活用できるまでには更なる研究が必要であろう。作品の表現には思春期の特性及び集団力動の影響が反映されており、1回だけのコラージュ作品から攻撃性予兆のアセスメントとすることには慎重でなければならない。452人の自己表現である作品の1枚1枚を真摯に受け止め、統計的処理では測れない制作者の心の理解には「コラージュ作品を聴く」⁶⁾態度が必要であり、そのためには多くの時間を要し、攻撃性尺度の選択なども併せ、今後の課題となった。一方で、調査対象の拡大と縦断的研究も必要と考える。

とはいえ、攻撃性がHH群の児童生徒の作品は、研究者らの印象評定で一定の傾向が示唆された。彼らは、同一素材(人・顔や銃、女子では猫や犬、宝石、など)を多用し、吹き出し文字内容が攻撃的で、生肉やすげかえなど組み合わせに不快感、違和感があった。重ね貼りも攻撃性H群の40~100%(小学生不表出性H群)に見られている。統合失調症患者に重ね貼りが少ないことから、「精神の重層性と関連する」⁷⁾といわれているが、心的エネルギーが攻撃性に向かうことも

考えられ、統合性のない重ね貼り作品では問題行動の予兆といえないまでも注意を要するであろう。「すげかえ」に注目し、多くの報告を持つ近喰(2000)は、喘息児童のサマーキャンプに自己啓発としてコラージュを導入し、「自他肯定型が一人もいなかった」⁸⁾と報告している。本研究で「すげかえ」は中学生男子のみに見られたが、異様な印象を与え、ギャグ、目立ちたい、他者の関心を引きたい、自分も変りたい(変身願望)などの表現と受け取れた。「快感」と付記した作品もあり(写真4)、これらは殺傷事件の報道にみる加害者心理と共通するものであり、攻撃性と無関係とはいえないと考える。

次に、健康調査票と攻撃性との関連についてであるが、本研究で対象が訴えた身体症状の平均個数は、前述の平井の調査結果よりも多かった。これは、厚生省の「心身症、神経症等の実態調査及び対策に関する研究」調査(1999)で「心身症と判断された児童の平均よりも多かった」⁹⁾という結果をさらに上回った。「目が疲れる」を筆頭に筋肉系症状等で高い割合を示し、男子にやや訴え個数は多いが、学年や男女差は殆ど見られなかった。精神状態では、コラージュ制作後に「ひまな—いそがしい」を除く14項目で肯定的変化をみた。

思春期は性的徴候が発現し、発達に性差が見られる時期でもある。今回の対象では訴える身体症状の傾向及び精神状態に性差、年齢差は見られなかったが、現代がストレスフルな社会、ユニセックス時代といわれることと無関係ではないとも感じられた。このような社会で、思春期にある児童生徒の攻撃性(表出性・不表出性)と心身症状の間には相関があり、攻撃性得点が上昇するほど身体症状の個数が増加するという結果が得られた。精神症状では、B校6年生に不表出性攻撃性と相関が見られている。健康と攻撃性とは関連があり、現代の児童の健康問題の背景に、内的攻撃性が関連している可能性が示唆された。

本研究では、コラージュ制作後に攻撃性は低下したことから、コラージュ法の活用が攻撃性予防に有用であるとする可能性が示唆されたと思われる。このことは、コラージュ法と同じく『遊び』感覚で自己表現を促すスクイグル法を用いて、子どもの描画と攻撃情動の関連を検討した中植(2004)の、実験後に「内向する攻撃エネルギーが描画を実施した実験群で有意に減少した」¹⁰⁾という報告でも裏付けられよう。

これらから、攻撃的な問題行動の前段階として、「何らかの精神・身体症状として表現されるのであろうか?」とする疑問への解答は得られた。思春期にあたる児童生徒の多くが心身症状を訴えている現状では、いつ、誰が問題行動(攻撃的)を起こしても不思議ではないと強く印象付けられた。

攻撃的行動化の予兆を把握し、予防措置を講ずるに

は、コラージュ法のみで判断することは避けねばならないが、子どもの訴えに耳を傾け、その言動を観察し、その心を理解するための手段としてコラージュ法の活用は意義があろう。単発的、継続的に学級活動の中に導入することで、コラージュのもつ治療効果が発揮され、攻撃的行動の予防的役割を果たすことに繋がる可能性は大きいと思われる。心的エネルギーの低下から、攻撃性の裏返しとも考えられる不登校や問題行動の改善に、コラージュを継続して導入した事例報告¹¹⁾など、コラージュの有効性や妥当性は多くの事例から明らかにされつつある。

V 結論

コラージュは現実に先行するといわれる。しかし、コラージュ上の表現だけで攻撃性のアセスメントとするには未だ、十分な基礎データと検討が必要である。実際の行動と合わせた観察評価や直接に気持ちを聴くインタビューも必要であり、対象を拡大した調査や縦断的研究も必要と考える。しかし、心身の健康調査と併せた結果、身体症状と攻撃性は相関することが判明し、コラージュ制作後に健康状態は好転した。質問紙法では得られない心理のアセスメントのためにもコラージュ制作という手法を用いたが、この体験は児童生徒から歓迎された。これは芸術療法に共通するカタルシス効果、自己治癒的効果が加わり、被験者に肯定的変化をもたらしたものと理解してよいと思われる。今後、更にこれらについての解明に努めたい。

このことを生かし、学級経営や児童生徒の心身の健康回復に、コラージュ制作を単発的、継続的に導入することで問題行動が減少するとする期待が可能となると考える。

<付記> この研究を実施するに当たり、快諾し、ご協力くださいました児童・生徒、保護者の方々および当該学校教職員、教育委員会の関係各位に謝意を表します。

VI 引用文献

- 1) 平井敦子：コラージュ作品からみた攻撃性表現—攻撃（表出性・不表出性）と精神・身体症状との関係。平成 15 (2003) 年度 修士論文要旨集 抜刷 東京家政大学大学院 文学研究科
- 2) 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子：小学生用攻撃性質問紙（HAQ-C）の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学研究紀要第 16 巻, 2001
- 3) 近喰ふじ子：コラージュ制作が精神・身体に与える影響と効果—日本版 POMS とエゴグラムからの検討— Japanese Bulletin of Arts therapy Vol. 31 No. 2, 2000
- 4) 杉浦京子：コラージュ療法—基礎的研究と実際—川島書店（東京）, 1994
- 5) 青木智子：コラージュ技法・療法の現状と課題—コラージュ技法の解釈・現状の成果と問題点 カウンセリング研究 Vol.33 No. 3, 2000
- 6) 山本映子：精神看護におけるコラージュ療法—心のケアへのアプローチ法として— 臨床看護研究の進歩 Vol. 8 pp.78 医学書院, 1996
- 7) 森谷寛之：砂遊び・箱庭・コラージュ—箱庭療法とコラージュ療法に関する雑感— pp.154 コラージュ療法入門 創元社, 1993
- 8) 近喰ふじ子：集団芸療法とコラージュ表現(1) —喘息サマースクールでの「すげかえ」表現と小児エゴグラムとの関係— 心身医学 41(6) pp. 420-427, 2000
- 9) 平井敦子：前傾 1) と同じ pp.182-183
- 10) 中植満美子：子どもの描画と攻撃的情動の継時的変化に関する研究—スキグル・ゲームを通じて—心理臨床学研究 Vol.22 No. 4 Oct. pp.386, 2004
- 11) 山本映子・野村幸子・中村百合子：不登校児の適応指導教室におけるコラージュの効果—地域における精神保健活動として—日本精神保健看護学会第 14 回学術集会抄録集 pp.54~55, 2004

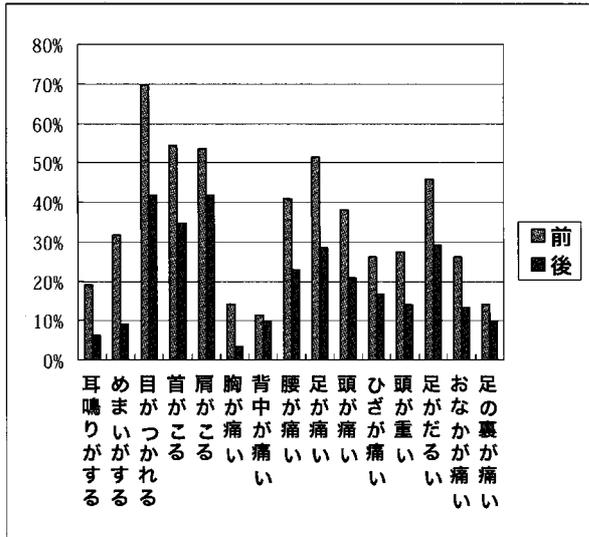


図 1-1 中学生のコラージュ制作前後の身体症状

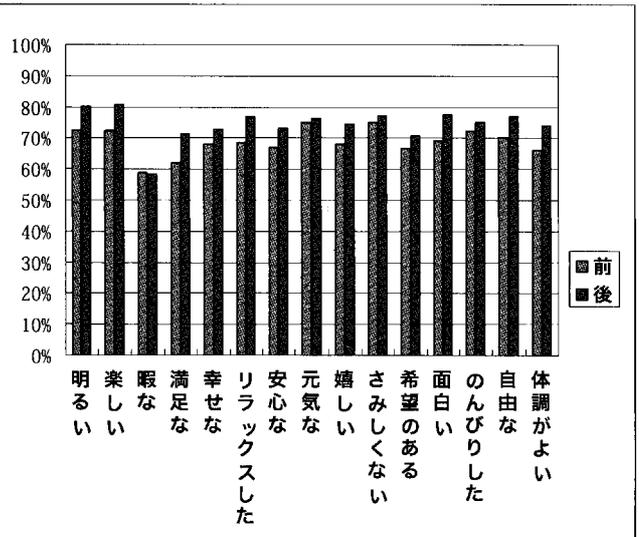


図 2-1 中学生のコラージュ制作前後の精神状態

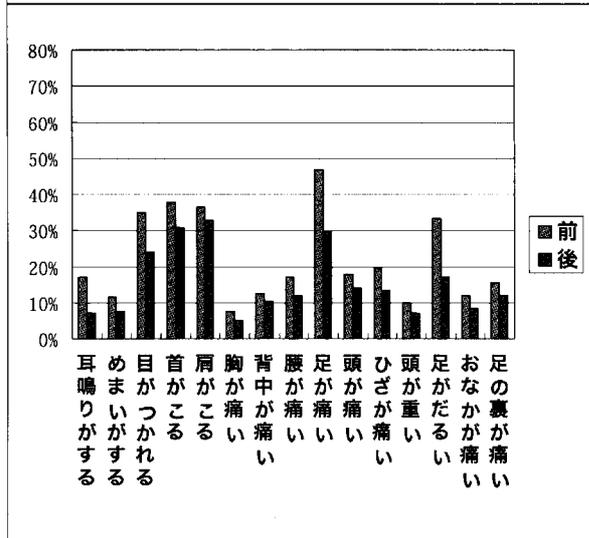


図 1-2 A小学生のコラージュ制作前後の身体症状

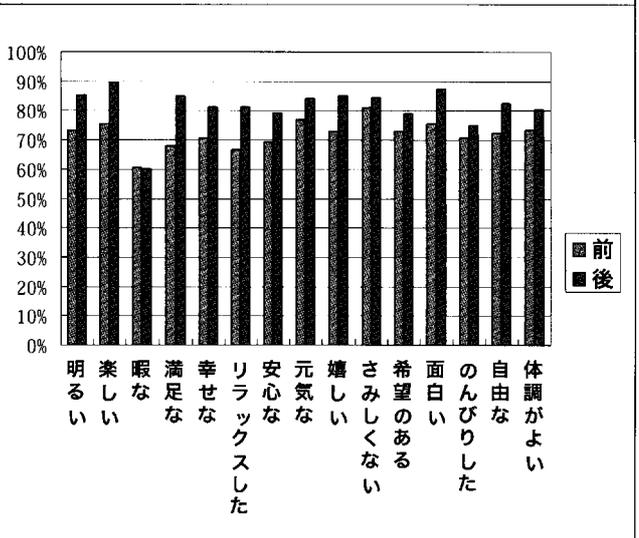


図 2-2 A小学校のコラージュ制作前後の精神状態

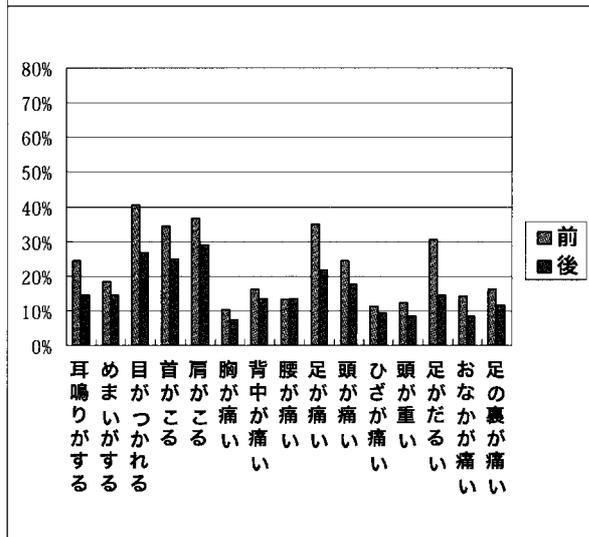


図 1-3 B小学生のコラージュ制作前後の身体症状

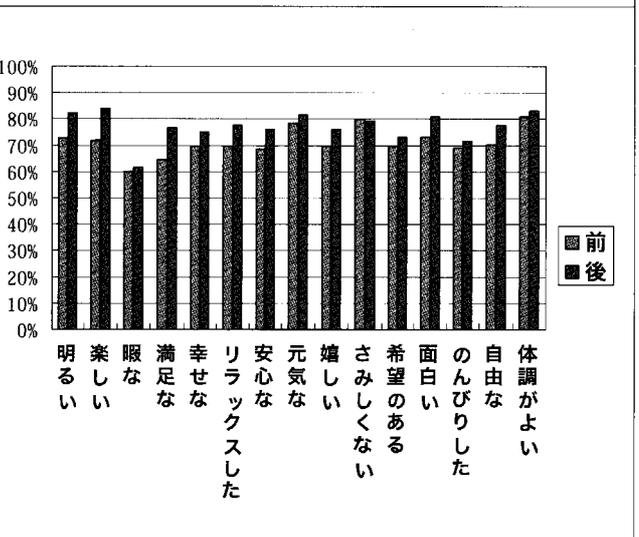


図 2-3 B小学校のコラージュ制作前後の精神状態

表1 コラージュ制作前後における攻撃性質問紙の結果

		n	制作前 平均 (SD)	制作後 平均 (SD)
中学校	表出性攻撃	全体(n=131)	20.21(5.31)	19.58(5.62)*
		男子(n=73)	21.26(5.11)	20.58(5.39)
		女子(n=58)	18.88(5.31)	18.33(5.70)
	不表出性攻撃	全体(n=131)	19.21(3.74)	19.18(3.78)
		男子(n=73)	19.84(3.91)	19.81(3.85)
		女子(n=58)	18.41(3.38)	18.40(3.57)
A小学校	表出性攻撃	全体(n=201)	19.29(5.39)	18.84(5.29)*
		男児(n=111)	19.24(5.71)	18.74(5.74)
		女児(n=90)	19.34(5.00)	18.96(4.71)
	不表出性攻撃	全体(n=201)	18.86(4.03)	17.21(4.49)**
		男児(n=111)	18.65(4.16)	17.43(4.82)**
		女児(n=90)	19.12(3.87)	16.93(4.06)**
B小学校	表出性攻撃	全体(n=99)	20.39(5.04)	20.67(5.38)
		男児(n=43)	19.70(4.95)	19.51(5.62)
		女児(n=56)	20.93(5.09)	21.55(5.06)
	不表出性攻撃	全体(n=99)	18.25(4.02)	18.32(4.04)
		男児(n=43)	18.60(4.32)	18.30(4.38)
		女児(n=56)	17.98(3.80)	18.34(3.80)

*P<0.05 **p<0.01

表2 攻撃性と健康との相関

		身体症状(個数)		精神的健康
中学校 n=146	表出性攻撃	r	0.17	-0.03
	不表出性攻撃	r	0.31**	-0.14
A小学校 n=146	表出性攻撃	r	0.23*	0.08
	不表出性攻撃	r	0.22*	0.02
B小学校 n=201	表出性攻撃	r	0.35**	0.02
	不表出性攻撃	r	0.20*	-0.39**

*p<0.05 **p<0.01

表3 エゴグラムと健康・攻撃性との関連

中学校		CP	NP	A	FC	AC
精神的健康	r	0.15	0.21*	0.16	0.37**	-0.27**
身体症状(個数)	r	0.24**	.176*	0.05	-0.06	0.40**
表出性攻撃	r	-0.01	-0.22*	-0.15	0.24**	-0.15
不表出性攻撃	r	0.06	0.04	0.11	-0.12	0.27**
A小学校		CP	NP	A	FC	AC
身体症状(個数)	r	-0.037	0.003	0.029	0.121	0.148
精神的健康	r	0.145	0.211*	0.135	0.29**	-0.032
表出性攻撃	r	0.006	-0.134	-0.096	0.349**	0.031
不表出性攻撃	r	0.091	0.071	0.093	0.319**	0.27**
B小学校		CP	NP	A	FC	AC
身体症状(個数)	r	0.185	0.237*	0.263*	0.219*	0.225*
精神症状	r	0.152	0.093	0.081	0.229*	0.039
表出性攻撃	r	0.169	-0.111	0.007	0.422*	0.149
不表出性攻撃	r	0.050	-0.125	-0.068	0.034	0.139

**p<0.01, *p<0.05

表 4-1 中学校表出性攻撃・不表出性攻撃とコラージュ形式分析の関連

	性別	n	用紙縦	すげかえ	はみだし	重ね貼り	吹き出し文字	銃の有無	切片数(平均)	余白の分量
全体		150	35 23.3%	16 10.7%	13 8.7%	77 51.3%	70 46.7%	36 24.0%	11.34 SD 6.87	49.5% SD 23.62
表出性攻撃H群	男子	15	3 20.0%	4 26.7%	1 6.7%	10 66.7%	11 73.3%	8 53.3%	12.67* SD 7.93	54.5% SD 26.17
	女子	9	1 11.1%	0 0.0%	0 0.0%	5 55.6%	0 0.0%	0 0.0%	5.67 SD 2.40	62.5% SD 27.62
不表出性攻撃H群	男子	19	3 15.8%	4 21.1%	2 10.5%	11 57.9%	13 68.4%	9 47.4%	12.16 SD 8.01	48.8% SD 26.18
	女子	6	2 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	3 50.0%	2 33.3%	0 0.0%	14.17 SD 7.52	38.9% SD 8.61

* p<0.05

表 4-2 A小学校表出性攻撃・不表出性攻撃とコラージュ形式分析の関連

	性別	n	はみ出し	重ね貼り	吹き出し文字	切片数(平均)	余白の分量
全体		201	11 5.5%	89 44.3%	41 20.4%	16.5	41.9%
表出性攻撃H群	男児	20	1 5.0%	2 10.0%	3 15.0%	14	42.9%
	女児	16	1 6.3%	7 43.8%	3 18.8%	21	47.3%
不表出性攻撃H群	男児	24	2 8.3%	10 41.7%	11 45.8%	13.0	45.8%
	女児	14	0 0.0%	6 42.9%	2 14.3%	20.5	49.8%

表 4-3 B小学校表出性攻撃・不表出性攻撃とコラージュ形式分析の関連

	性別	n	用紙(縦)	はみだし	重ね貼り	吹き出し文字	切片数(平均)	余白の分量
全体		99	5 5%	11 11%	64 65%	55 56%	12.01	47.0%
表出性攻撃H群	男児	5	0 0%	1 20%	3 60%	1 20%	10.1	55.9%
	女児	8	0 0%	1 20%	4 50%	3 38%	11	59.0%
不表出性攻撃H群	男児	7	1 14%	1 14%	7 100%	2 29%	11.1	44.3%
	女児	5	0 0%	0 0%	2 40%	4 80%	11.9	40.5%



写真1 表出性攻撃性H群男子

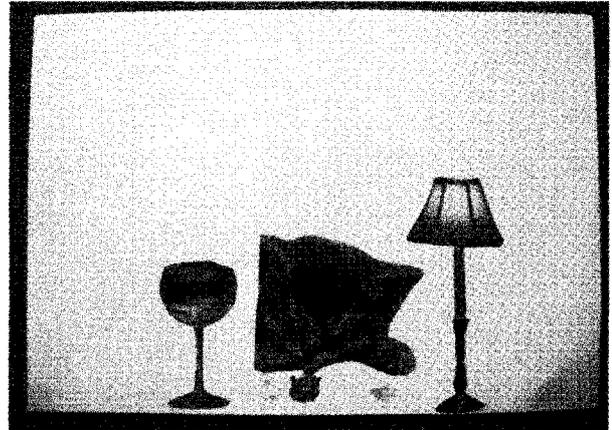


写真2 不表出性攻撃性H群女子



写真3 攻撃性HH群男子



写真4 攻撃性なし男子(すげかえ)

An Exploratory Study of Countermeasures for Problem Behavior in Juveniles: Investigating and Preventing Aggression Using Collages

Eiko YAMAMOTO*¹ Sachiko NOMURA*¹ Yuriko NAKAMURA*¹
Akira KITAGAWA*¹ Hitomi TAKESHITA*² Sanae KITAGAWA*³ Fujiko KONJIKI*⁴

*1 Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

*2 Hatukaichi Nosaka Public Junior High School

*3 Kannabe Yuda Public Elementary School

*4 Tokyo Kasei University

Received 12 September 2005

Accepted 13 December 2005

Abstract

The purpose of this research was to investigate methods of uncovering aggression in children at an early stage and to search for countermeasures to prevent the acting out of this aggression. The objects of study were 452 children who were either in the 5th or 6th grade of elementary school or in the 2nd grade of junior high school.

Considering it important to first understand their physical and mental health, we investigated their health and aggressiveness using a written health survey, psychological test (egogram), written questions focusing on expression and non-expression of aggression, and a self-projective collage method. We then investigated the relationship between outward and inward aggressiveness and the collages produced by the young people. The results of our analysis showed that the relationship between them was not directly significant. There seemed to be other factors influencing the collages, in particular characteristics of adolescence and group dynamics. However, the tendency to inspire aggressive items was confirmed. With regard to the physical and mental state, making collages reduced significantly the occurrence of aggression, demonstrating the cathartic effect of the collage itself and suggesting its suitability as a countermeasure against aggressiveness.

Key words : Adolescence, Aggressiveness, Collage, Aggressive item, Effect of catharsis